

七月二十四日 日曜日

六時半起床。荷づくり、書類整理。お茶を飲んで八時前発。羽田へ向かう。日曜の朝の電車は人も少なく、さわやかな密度だ。二〇五〇年は平日でもこれ位の人の密度になっているのかな。九時三五分羽田空港56番ゲート着。空港には子供が溢れている。夏休みになったんだ。十時半羽田発。十二時十五分福岡空港着。Oさんと空港内で昼食。竹内土建、蔭久氏と合流し田辺木材店へ。棟梁と打ち合わせ。木を見る。キッチンとした仕事をしていて、ホッとする。十五時四〇分迄。暑い。浄水の現場チエック。上棟は二週間ほど遅れそうだ。基礎、及び地盤改良は土建屋さんだけあって良い仕事である。隣の竹中工務店のマンションも程良い距離で建ち上がりつつあり、O邸への圧迫感等心配していた程の事はない。都市内居住は色々とガマンしなければ成立しないのだから大都市の只中に住む事とはそういう事、お互いのガマンの調整なのだ。十六時半、現場近くのKKR HOTEL・HAKATAチエックイン。一息つく。十七時前ロビーでOさんと打ち合わせ。十八時半現場で植木屋さんと打ち合わせ。マア、のんびりゆこうやという事になる。十九時半HOTEL・NEW OHTANI、地下のレストランでカンサイ社長O氏と打ち合わせ、会食。二十一時二〇分迄。二十一時半過KKR HOTELに戻る。おいしいモノを程々に食べて、腹一杯になっているのではないが、これ位が良い。考えてみれば食生活に関しては、ひどい世界の住人であつたのが、今は良くわかるな。要するに腹も肝臓も六分目が一

番MAXIMUMなのである。

明日は北京PのKオーナーが東京に来て、大ツメの峠だ。私としても、打ち網をたぐり始めなければならない。この間の、つまり北京オリンピックサイトのプロジェクトの顛末は、十月からの工作社刊「室内」に書く予定だ。二〇〇八年の北京オリンピックは二十一世紀初頭の世界史の分水嶺である。二十一世紀は二〇〇一年、九・一一で始まってしまったが、大きく眺めれば、やはり北京オリンピックが大きな節目だろう。アメリカ帝国主義に対する力は中国にある。建築世界の未来も、何もかも、アメリカと中国の不安定なバランスの中にしか描き得ないのだ。少々、疲れたので、休むとしよう、二十三時十五分、眠ろうとする。